

日中戦争期における中央青年劇社の話劇創作と上演：

一幕劇『灘上』と『盲者之死』を例に

楊 韜

〔抄 録〕

本稿は、日中戦争期の「中央青年劇社」に焦点をあて、『灘上』と『盲者之死』という二つの作品の内容分析を通して当時に行われた話劇脚本創作と上演の実状を考察し、その初期活動の実態と特徴を探るものである。『灘上』と『盲者之死』という二つの作品は、中央青年劇社の比較的に早い時期に創作された話劇作品だが、登場人物やストーリーの展開、そして戦時下における宣伝意図などの各側面において十分な工夫がなされており、のちに大量に現れる戦時下話劇作品に共通している特徴が大いにみられるものである。いずれも未熟さがあるものの、抗戦話劇としては高く評価できる。

キーワード 中央青年劇社、一幕劇、日中戦争

1 はじめに

日中戦争期における抗日話劇活動について、これまで多くの研究がなされた。代表的なものとして、孫曉芬 (1989)、Hung (1994)、石曼 (1995)、阪口直樹 (1998)、瀬戸宏 (1999)、傅学敏 (2010)、邵迎建 (2011)、段從学 (2012)、阿部幸夫 (2012) などが挙げられる。本稿では、これまでほとんど注目されてこなかった「中央青年劇社」に焦点を当てる。具体的には『灘上』と『盲者之死』という二つの作品の内容分析を通して中央青年劇社の話劇脚本創作と上演の実状を考察し、中央青年劇社の初期活動の実態と特徴を探る。

2 中央青年劇社について

まず、中央青年劇社の由来を簡単に紹介しておこう。1938年「平漢鐵路救亡宣伝隊」⁽¹⁾は武漢へ遷り「漢口宣伝隊」と合流し、「三民主義青年團武漢支部戦時服務総隊漢口宣伝隊」となっ

た。⁽²⁾ 1939年1月、三民主義青年団中央団部は「中央団部青年戯社」を設立、1939年11月に正式に「中央青年戯社」へと組織改編した。本稿で取り扱う話劇作品である『灘上』と『盲者之死』は主に「中央団部青年戯社」時期に創作されたものと推測する。

三民主義青年団とは、抗日戦争期に組織された中国国民党の青年組織である。1938年3月、武漢における国民党臨時全国代表大会で、青年層を抗日戦争に動員するために三民主義青年団を組織することが決定された。その後、三民主義青年団中央組織が成立し、各地に基礎組織が設置された。抗日戦争期において多くの青年層を吸収し、戦時体制への動員に成功したといわれている。しかしその後、中国国民党中央、とくにCC系との組織的な対立が激化、1947年に党との合併によって解消された。⁽³⁾

1939年に設立された中央青年劇社は、国民党の下部組織ではあったが、1941年3月の二度目の組織改編後、老舍・洪深・曹禺らの知識人が編集陣に加わり、さらにその後「国立戯劇専科学校」の卒業生が次々に入社したことから見て、中国共産党側の影響もあったと思われる。⁽⁴⁾ 中央青年劇社は多くの話劇を上演したが、なかでも楊村彬⁽⁵⁾ 創作の歴史劇『清宮外史』がとりわけ注目された。『清宮外史』三部曲の一つである「光緒親政記」は6時間にわたる上演であったにもかかわらず、観衆は欠伸一つせず最後まで観賞したといわれている。⁽⁶⁾ 筆者の調査によると、『清宮外史』は大幅な黒字で大成功を収めた。その利潤は中央青年劇社の収入源の一つとなり、自社施設の建設に当てられた。中央青年劇社は、重慶市内の渝中一路帰元寺57号の向かいの土地を購入し、社員宿舎などを建てた。⁽⁷⁾ しかし、このようなことは抗日戦争期においては稀なことであった。1943年以降、民間の話劇団体だけでなく、「中電」・「中万」など国民政府系の話劇団体も深刻な経済危機に陥り、赤字回避するため上演回数を減らさざるを得なかった。⁽⁸⁾

3 関連史料について

中央青年劇社に関する史料は、筆者が調べた限り多くないが、以下の三種類が挙げられる。まず、機関誌である『青年戯劇通訊』が一部四川大学図書館及び重慶図書館に残されており、閲覧できる。この『青年戯劇通訊』には、当時の組織状況、とりわけ各地域にある青年劇社に関する活動報告が掲載されている。ほかに、当時創作した話劇作品の脚本の一部や話劇理論に関する評論も掲載されている。

次に、当事者による回顧録である。代表的なものは張家浩氏による回顧録「追憶馬彦祥二三事」、馬彦祥氏による回顧録「我在「中青」的兩年半」、馬思猛氏による回顧録「我的父親馬彦祥与洪深」などが挙げられる。これらは、中央青年劇社のトップを務めた人物による証言であるが、証言を考証する史料が少ないため、慎重に使用しなければいけない。

最後に、中央青年劇社の運営資金や組織に関する史料は非常に少ないが、前述の台北にある

中国国民党文化傳播委員会党史館所蔵の特殊档案が挙げられる。三民主義青年団江蘇省支団部籌備処報告主任である顧希平が三民主義青年団中央幹事会に宛てた「三民主義青年団江蘇省支団部籌備処報告」、中央青年劇社社長である閻哲吾が三民主義青年団中央幹事会に宛てた「三民主義青年団中央青年劇社報告」、慶市渝中一路に社屋を建てたときの土地契約書などがある。

4 先行研究の整理、本研究の対象・視座

筆者が調べた限り、中央青年劇社に関する先行研究は多くないが、呉若・賈亦棣(1985)、傅学敏(2010)、段麗(2012)、段麗(2014)などが挙げられる。以下、これらの先行研究の内容と傾向を整理したうえ、本稿の分析対象及び考察視座を述べる。

まず、中央青年劇社の評価である。国民党の下部組織であった中央青年劇社は、その政治的な性格から、戦後中国における話劇研究のなかで、ほとんど無視されてきたように思われる。ようやく最近となって、段麗(2012)のようなものが現れた。台湾側でも言及は少ないが、肯定的に評価されている。呉若・賈亦棣(1985)は、「青年団系列の劇社、宣伝及び抗日戦争に一定の貢献をしただけでなく、当時の青年運動にもかなり推進的な役割を果たした」⁽⁹⁾と評価している。

次に、中央青年劇社の特徴や独自性である。中央青年劇社は、同時期の所謂「官弁」話劇団体とはどう異なるのか。傅学敏(2010)は「異なる部門の劇団の活動には異なる重心が置かれている(中略)青年劇社はとりわけ青年に対する浸透を重視した」⁽¹⁰⁾と述べている。

最後に、所管機関である国民党との関係についてである。1940年代国民党側による管理・干渉について、段麗(2012)は詳しく論じ、国民党側が脚本の選定プロセスによって自らの宣伝方針を推進しようとしたが、中央青年劇社内部からの抵抗もあり、結局劇社の解消へと繋がったと述べている。

先行研究の多くにおいては中央青年劇社の組織的な側面(人事などを中心に)に重点が置かれ、劇社そのものに関する考察、とりわけ上演作品に関する分析がほぼ無きに等しい。たとえば、段麗(2012)は「劇本荒(深刻な脚本不足)」について触れた際に本稿で取り上げる『灘上』に言及しているが、その内容についてはまったく分析しておらず、実際に上演された作品に対する考察には具体性が欠如している。従って、本稿はこのような問題を解決するため、具体的なテキスト分析を通して、当時上演された作品の特徴を考察する。分析に入る前に、まず分析対象の概要を述べておこう。

ここでの分析対象は『灘上』と『盲者之死』という二つの作品である。これらは、張恵良著『三民主義青年団実験戯劇集』に収録されている全四篇の作品のなかの二つである。この『三民主義青年団実験戯劇集』は、1940年に上海雑誌公司によって出版されており、定価は国幣4角5分となっている。当時の出版動機について、「序文」を書いた魯覺吾は「この劇集に収めら

れた四篇の独幕劇（一幕劇）は、社友である張恵良が創作したものである。中央青年劇社実験劇場において数回に渡り実験上演したが、反響はよかった。各地の青年劇社も脚本が不足しているため、ひとまず出版することにした⁽¹¹⁾と紹介している。それに加え、著者の張恵良も次のように述べている。「この四篇の作品がいずれも完成度が高いとは言えないが、「劇本荒」の現在において皆様に献呈することは決して無益なことではないだろう。」⁽¹²⁾以上からわかるように、この『三民主義青年団実験戯劇集』が出版された目的は、やはり当時の深刻な話劇脚本不足の解消にあった。また、この『三民主義青年団実験戯劇集』に収録された四つの作品はすべて「独幕劇（一幕劇）」であり、内容が短く登場人物もそれほど多くないことから、上演までの準備期間が短縮できたと推測される。これも、当時の情勢に合った対処法であろう。抗日戦争期における話劇の形式は、「街頭劇」・「活報劇」などが挙げられるが、「戦争初期には独幕劇（一幕劇）」がとくに多かった。⁽¹³⁾

5 『灘上』・『盲者之死』の脚本分析

以下、『灘上』と『盲者之死』という二つの作品のあらすじと配役（出演者）を紹介したうえ、その台詞の事例や上演後の反響も取り上げ、作品の内容と特徴を分析したい。

(1) あらすじ

『灘上』

川辺の砂浜で、数人の纤夫（「纤夫」とは船を引く肉体労働者のこと）たちが船を引いている。纤夫頭（「纤夫頭」とは船を引く肉体労働者たちを管理する人のこと）の官麻皮は「早く動け！」と罵声を浴びせている。休憩時間になると、纤夫たちと官麻皮は給料について話し合っていた。そこへ国民政府軍の軍人である周連長がやってきて、政府軍の船を引いてほしいという。周連長が提示した50元に対し官麻皮は200元の報酬を要求し拒否したが、纤夫たちは日本軍の暴行について話しあった後政府軍に協力した。その後、日本軍から逃れてきた難民たちが川辺にやってきて、すぐに日本軍も近づいてきた。日本軍の命令（武器を積んだ日本軍の船を引くこと）を纤夫たちは拒否しようとしたが、官麻皮は一所懸命に日本軍人たちの機嫌を取り、纤夫たちに船を引くよう命じた。さらにその後、日本軍人は難民たちを殺害した。ここにやってきた丁老五は以前官麻皮に苛められ纤夫業をやめ、遊撃戦に参加した人物である。丁老五は纤夫たちに自らの抗争を呼びかけ、最後に官麻皮と日本軍人に勝利した。

※※※

『盲者之死』

陥落した武漢市内のある邸宅で、鄭人仇が反日の曲をバイオリンで弾いている。妹の鄭人美は心配しながら話をしている。鄭人仇はかつて大学を辞め第26軍に入って「台兒莊戦役」の戦場で日本軍と闘った。鄭人仇兄妹は、戦争中に家を失い、一時的に叔父である鄭方生の家に身を寄せている。鄭人仇は武漢に侵入した日本軍から「武漢陥落祝賀会」でバイオリンを演奏するよう命じられていた。また、鄭方生は漢奸である計谷生に唆され、姪の鄭人美を日本軍人と結婚させようとしている。一方、鄭人仇は妹をその恋人の蔣志英と一刻も早く武漢から逃げるよう一所懸命鄭人美を説得している。鄭人美は、戦地で負傷し目が見えなくなった兄を残し去っていけないと拒んでいたが、ようやく兄の言うことに従い、蔣志英と一緒に逃れることを決意した。蔣志英は武漢から離れる前に日本軍をターゲットとする爆弾テロを計画した。最後、爆弾テロが実行され、鄭人美と蔣志英は無事に逃れたが、鄭人仇は日本軍に殺害された。

(2) 配役

『灘上』と『盲者之死』の配役について、以下の表に示す。

作品名	監督	役 (出演者)	舞台セット
『灘上』	況夫	纒夫甲：万少于 纒夫乙：呂義華 纒夫丙：劉繼昌 纒夫丁：杜俊昇 纒夫戊：何孝頤 纒夫己：朱仁才 纒夫庚：林加涛 纒夫辛：陶飛 官麻皮 (纒夫頭・漢奸)：管公衛 周連長 (国民政府軍軍人)：房勉 日本人士官：周志羣 日本兵甲：曾扎 日本兵乙：李道仲 日本浪人：万超 劉周氏 (難民)：韓昌俠 小菊 (劉周氏の娘)：許那民 丁老五 (元纒夫)：陶杰	川辺の砂浜
『盲者之死』	況夫	鄭人仇：張惠良 鄭人美 (鄭人仇の妹)：龔琦 鄭方生 (鄭人仇兄妹の叔父)：万超 老王 (鄭方生の使用人)：徐嗣興 蔣志英 (鄭人美の恋人)：李清燦 周老七 (計谷生の使用人)：張叔儀 計谷生 (漢奸)：管公衛 日本兵：周志羣	武漢市内の住宅の部屋

(3) 台詞の事例

『灘上』

※刘大爷，难道日本鬼子你都不知道吗？日本是一个国家，因为他们那个国家的人都是鬼鬼崇崇的，所以都叫他做日本鬼子。

【劉爺さん、まさかあなたは「日本鬼子」を知らないのか。「日本」とは一つの国であり、その国の人々がみんな「鬼鬼崇崇（陰でこそこそする）」だから、彼らを「日本鬼子」と呼んでいる】

※日本鬼子为什么要撵他们走呢？

【なぜ日本軍は彼らを追い払うのか。】

※上次那位王先生对我们演讲的时候不是告诉过我们吗，因为日本鬼子要灭亡我们的国家，所以才撵走他们，不但说要撵走他们，说不一定有一天还要撵走我们呢。

【この間演説してくれた王さんが言ったではないか。日本軍は我々の国を滅亡させようとしているから、追い払わなければならない。そうしないと、いつか我々が追い払われるよ。】

※听说有一家人家，有一个十二三岁的小姑娘，因抗奸不遂，就被鬼子们用刺刀刺死了。

【ある家の12、3歳の娘が日本軍に暴行され抵抗したら、銃剣で殺された。】

※今天早晨我们家里隔壁还搬来了一个从别处逃难来的人，他说那些被敌人占领了的地方的老百姓，不论男女老少都要他们去当兵打咱们中国人呢。

【今朝うちの隣からまた逃れてきた人が引っ越してきた。その人によると、日本軍は占領した地域の人々を老若男女関係なく全員軍隊に入れ、我々中国人に銃を向けさせている。】

※他妈的，你们从那儿听来的这些胡话，快别说了。什么日本鬼子不日本鬼子，老子拉老子们的纡吃老子们的饭，谁来也不管。

【でたらめだ、やめなさい。日本軍なんか関係ない、我々は船を引いて飯を食べるだけだ。誰が来ても変わらない。】

※※※

『盲者之死』

※自从这里沦陷以后，我就像失掉了灵魂似的，整天坐卧不安，有时候我的心像火山一样的要爆发，我要把我淤积的怒火，一齐唱了出来，这样，我才能安慰一点……

【武漢が陥落してから、私は靈魂を失ったようだ。毎日居ても立ってもいられない。時には心がまるで火山のように爆発しそう。私は心に溜まっている怒りのすべてを歌いたい。そうしたらようやく少し安らぎを感じられる。】

※你为了争取人类的正义，你为了争取民族的自由，你曾经用你的武器—书笔，写出法西斯强盗的兽行，写出中华民族子孙的勇敢……

【お兄さんは人類の正義のため、民族の自由のため、かつて筆という武器を手にしてファシズム鬼畜が行った残酷な暴行を表現し、同時に中華民族の人々の勇敢さも描き出した。】

※我的眼睛虽然瞎了，但是我的光明仍然没有失去，在我过去眼睛睁着的时候所刻在心底的一些美丽，勇敢，光明的过去，是多末还看的一帆图画啊。当它放映在我的眼里的时^マ候，我是高兴得要跳起来……

【私は目が見えなくなったが、心のなかの光は失っていない。昔見た風景が私の心に刻まれ、美しさ、勇敢さ、光など、素晴らしい絵となっている。その絵が私の目に映ると、あまりにも嬉しくてドキドキする。】

(4) 考察

作品の内容や台詞の分析・比較を通して、以下の三つの側面から『灘上』と『盲者之死』の特徴を考えたい。

第一に、この二つの作品に想定されている観衆は明確で、それによってうまれた差異がはっきりとわかる。『灘上』は主に識字率が低い低層労働民衆を対象としているが、『盲者之死』は教育を受けた知識青年を対象としている。『灘上』の創作背景について、著者の張恵良は次のように述べている。三民主義青年団武漢支部戦時服務総隊漢口宣伝隊は船で洩灘（現在の湖北省秭帰県）というところに移動したとき、船の馬力が足りず現地の纤夫たちに協力してもらった。これを機に、現地の人々に話劇を上演した。しかし、現地の人々の多くは纤夫であり、ほとんど教育を受けたことがなかったため、宣伝隊が上演した話劇は難しすぎて理解できなかった。宣伝隊の一人は纤夫たちの日常生活を舞台とする劇を作ろうと提案した。その結果として、『灘上』という作品が創られた。そして、再度上演してみると、かなり良い反響があった。⁽¹⁴⁾

一方、『盲者之死』の主人公は、教育を受けた知識青年である。とくに鄭人仇はバイオリンを弾ける青年である。すでに取り上げた『灘上』と『盲者之死』の台詞例からも読み取れるように、登場人物によって、喋るときの表現は大きく異なる。『灘上』の纤夫たちが発する言葉は日常でよく聞かれるわかりやすい表現がほとんどであるのに対して、『盲者之死』の鄭人仇兄妹は難しい表現を使っている。とりわけ、「靈魂」や「正義」など抽象的な表現が目立つ。このような使い分けは、やはり異なる観衆、すなわち異なる宣伝対象によって意図的に用いら

れたと思われる。

第二に、観衆に合わせたストーリーが工夫されている。『灘上』の主人公である纤夫たちは、長年ひたすら地元で働き、外の社会との接点もほとんどなかったようだ。よって、日本軍による中国侵略の情勢についてもあまり知らなかった。この点に関しては、当時の中国奥地の多くの民衆にもよく見られた社会現象である。彼らは、日本軍による侵略を知らないだけでなく、その侵略と自身との関係についても無自覚であった。したがって、『灘上』において、纤夫たちに日本軍の侵略活動の残酷さを最大限認識させ、戦争に対する無知から目を覚ませようとした。作品のなかで、複数回にわたり、様々な人から聞いた「情報」が伝えられ（まるで複数のストーリー・テラーを登場させるような方法で）、それによって日本とは何か、日本軍が犯した罪とは何かがさりげなく教え込まれた。さらに後半では、難民たちが目の前で殺されたことによって纤夫たちが日本軍に恐怖を感じるよう仕向けることに成功した。最終的には、観衆はこのような悲惨な現実を直視し、自ら反抗するようになった。

一方、『盲者之死』の主人公たちはすでに日本軍の侵略とその残酷さをよく知っていたようだ。しかも、鄭人仇のように日本軍と戦って負傷した人物が登場する。彼らには、日本軍の侵略という事実を改めて認識させる必要はない。むしろ重要視されているのは、知識青年たちがどのようにして抵抗すべきかということであった。『盲者之死』においては、二つのことが重要なポイントとなっている。一つ目は、目が見えない兄を残して去る決心がつかない鄭人美が、「家族」の危機よりも「国家」の危機だと説得されたことである。作品は、家族を守ることは重要だが、国を守ることができないと家族も結局被害者となるということを意図的に表現した。二つ目は、知識青年が自ら武器をもって戦うべきだと告げられたことである。鄭人美の恋人である蔣志英は、爆弾テロを計画し、最後は鄭人美と一緒に実行した。『灘上』と『盲者之死』の二作品には、ストーリーとともに「自分を守る」や「家族を守る」という行動を「国を守る」という行動へ導くという意図が潜んでいる。言い換えれば、「私」から「公」への意識転換である。また、当時の都市知識青年の抗日活動によく見られる移動ルート（淪陷区から大後方へ、さらに前線へ）も作品に反映されていると思われる。

第三に、対立軸や反面教師となる人物設定などが共通している。『灘上』と『盲者之死』の二作品とも、いくつかの対立的な軸を設け、関係人物の抗争する構図が作り上げられている。『灘上』では、纤夫たちと対立する人物は纤夫頭の官麻皮及び日本軍である。この対立軸はさらに二種類に分けられている。一つ目は、階級的な対立闘争である。長年官麻皮は纤夫たちの報酬の上前を取って纤夫たちを搾取してきた。しかし、一部の纤夫は官麻皮を恐れて反抗しなかった。丁老五の登場によって認識が変わり最終的には立ち向かうようになった。すなわち、「服従者」から「反抗者」へと変身した。二つ目は、無論中国人と日本軍の間の対立闘争である。最初は自身とは関係ないと考えていた日本軍侵略が目の前に迫ってきて、他人事ではなくなった。さらに目の前で起きた難民たちの殺害がこの対立意識をより鮮明なものにした。

一方、『盲者之死』にも二種類の対立軸が見える。一つ目は、言うまでもなく知識青年と日本軍の間の対立である。二つ目は、鄭人仇兄妹とその叔父の間の対立である。日本軍に媚を売る叔父に対して、鄭人仇兄妹は怒りと屈辱を覚えた。さらに、日本軍の武漢陥落祝賀会で演奏することや、日本軍人との結婚まで強いられる鄭人仇兄妹は、とうとう叔父を親族として看なせなくなった。最終的には、身内を切る決断をした。ほかにも、『灘上』と『盲者之死』は共通して漢奸という人物が登場する。『灘上』の官麻皮と『盲者之死』の計谷生は、いずれも日本軍の侵略と迫害の共犯者であり、戦時下の人間像をリアルに反映している。一方、啓蒙者としての丁老五（周連長も同じように設定されている）と蔣志英の働きは、主人公たちの意識変革を確実なものへと導き、最終的にその実践行動につながっていったと言えよう。

6 結びに

以上見てきたように、『灘上』と『盲者之死』という二つの作品は、中央青年劇社の比較的に早い時期に創作された話劇作品だが、登場人物やストーリーの展開、そして戦時下における宣伝意図などの各側面において十分な工夫がなされており、のちに大量に現れる戦時下話劇作品に共通している特徴が大いにみられるものである。未熟さがあるものの、抗戦話劇としては高く評価できる。中央青年劇社の活動に関しては、まだ不明な点も多く、さらに深く掘り下げていく必要がある。当面の課題として、たとえば、『盲者之死』の挿入歌『中華的儿女』についてその創作背景や当時の「抗日歌曲」との関連などを解明していきたい。また、本稿で取り上げた作品『灘上』と『盲者之死』は中央青年劇社の初期に創作された作品であるが、その後、とくに1941年太平洋戦争勃発以降中央青年劇社はどのような話劇作品を創作・上演したのかを追跡し、比較していく必要もあるだろう。また、これによって「劇本荒」問題が解消されたのか/どの程度解消されたのかも今後検討の視野に入れたい。

〔注〕

- (1) 1937年以降、多くの救亡演劇隊が各地に移動しながら話劇活動を行っている。その様子について、瀬戸宏（1990）、拙稿（2015）参照。
- (2) 参考として、この時期の活動に関する日本側の史料をみると、三民主義青年団武漢支部には「戯劇部・戦時服務部・農村宣伝部・撮影隊・特務隊」などの部門が設けられていた。1938年武漢陥落後、一部が連絡員として市内に残留し、他の部員は一時フランス租界に止まりその後近郊へ移り活動を続けた。通信調査会（1940）、38-39頁。
- (3) 『岩波現代中国事典』423頁参照。ただし、菊池一隆（1997）は、1938年の国民党臨時全国代表大会の開催日を5月29日としている。また、菊池氏のこの論文に記録された三民主義青年団とCC系との対立をめぐる当事者であった陳立夫氏による証言も参照されたい。
- (4) 孫曉芬（1989）、57-58頁。国民政府系の話劇団体における中国共産党の浸透と影響については、馬彦祥（2008）などの回顧録も参照されたい。
- (5) 楊村彬は、1911年北京生まれの劇作家。1932年北京北平大学芸術学院卒業、1938年以降、四川省立

戯劇教育実験学校教務主任・国立戯劇専科学校教授や教務主任・中央青年劇社副社長などを歴任。
孫曉芬（1989）、109-111頁参照。

- (6) 石曼（1995）、120頁。
- (7) 台北・中国国民党文化傳播委員会党史館特殊档案「特24/1.109」参照。
- (8) 馬俊山（2002）、135頁。
- (9) 吳若・賈亦棣（1985）169頁。
- (10) 傅学敏（2010）82頁。
- (11) 張惠良（1940）、1頁。
- (12) 張惠良（1940）、3頁。
- (13) 田禽（1946）、9-10頁。
- (14) 一方、作者の張惠良は、『灘上』を纤夫以外の観衆の前で上演したとき、反響があまりよくなかったことを認めている。

〔付記〕

本稿は、2016年10月8日に北京・清華大学において開催された国際シンポジウム「1940年代戦時宣伝及媒体表象」で口頭発表した内容に加筆したものである。なお、本稿は科学研究費【基盤研究（B）『中国建国前夜のプロパガンダ・メディア表象』（課題番号：15H03176）】研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

〔文献一覧〕

<日本語（五十音順）>

天児慧ほか編『岩波現代中国事典』（岩波書店、1999）

阿部幸夫『幻の重慶二流堂：日中戦争下の芸術家群像』（東方書店、2012）

菊池一隆「陳立夫氏へのインタビュー：三民主義青年団、「C・C系」の呼称、及び日本人への提言」『中国研究月報』51（6）、28-43頁、1997

阪口直樹「『国統区』文化活動における「西南劇展」の位置」『言語文化』1（1）、47-69頁、1998

瀬戸宏『中国演劇の二十世紀：中国話劇史概況』（東方書店、1999）

通信調査会編『国民党の青年運動と三民主義青年団』（通信調査会、1940）

楊韜「八千里路雲和月：戦時下移動演劇隊の実態と表象」『中国言語文化研究』15、101-132頁、2015

<英語（アルファベット順）>

Hung, Chang-tai *War and Popular Culture: Resistance in Modern China, 1937-1945*. (University of California Press, 1994)

<中国語（ピンインローマ字順）>

陳志昂『抗戦音楽史』（黄河出版社、2005）

- 段從学『「文協」与抗戰時期文芸運動』(北京大学出版社、2012)
- 段麗「20世紀40年代官方戲劇理念在中央青年戲社的实践与推行」『戲劇芸術』2012年第6期
- 段麗「1946：国民党官弁劇団の解散与分化—以中万、中電、中青為例」『南大戲劇論丛』2014年第12期
- 傅学敏『1937-1945：国家意識形態与国統区戲劇運動』(中国社会科学出版社、2010)
- 葛一虹主編『中国話劇通史』(文化芸術出版社、1990)
- 李建平『桂林抗戰文芸概観』(漓江出版社、1991)
- 劉平『中国話劇百年図文志』(武漢出版社、2007)
- 馬俊山「論国民党話劇政策の両歧性及其危害」『近代史研究』2002年第4期
- 馬思猛「我的父親馬彥祥与洪深」『档案春秋』2008年第11期
- 馬彥祥「我在「中青」的两年半」『縱横』2008年第2期
- 上海図書館『中国近現代話劇図志』(上海科学技術文献出版社、2008)
- 邵迎建『上海抗日時期的話劇』(北京大学出版社、2011)
- 石曼『重慶抗戰劇壇紀事』(中国戲劇出版社、1995)
- 宋宝珍『中国話劇史』(北京三聯書店、2013)
- 孫曉芬編著『抗日戰爭時期的四川話劇運動』(四川大学出版社、1989)
- 田本相・石曼・張志强『抗戰戲劇』(河南大学出版社、2005)
- 『中国話劇百年図史 上・下』(山西教育出版社、2006)
- 田漢『抗戰與戲劇』(商務印書館、1937)
- 『田漢文集』第15卷(中国戲劇出版社、1983)
- 田禽『中国戲劇運動』(商務印書館、1946)
- 王良卿『三民主義青年団與中国国民党關係研究：1938-1949』(近代中国出版社、1998)
- 吳若・賈亦棣『中国話劇史』(行政院文化建設委員会、民国74年=1985)
- 夏嵐「熊佛西与觀衆」『富山大学人文学部紀要』60、135-149頁、2014
- 張家浩「追憶馬彥祥二三事」『上海戲劇』1989年第6期

<史料>

- 台北・中国国民党文化傳播委員会党史館所藏特殊档案
- 張惠良『三民主義青年団実験戲劇集』(上海雜誌公司、1940)
- 『青年戲劇通訊』(1940～1942年)

(よう とう 中国学科)

2016年11月11日受理